

「世紀を超えた鳥類の標本」 p 6 に掲載
 金井 清 (1884-1966) 上諏訪町 (現諏訪市) 出身

金井汲治の長男として生れ第一高等学校 (現東京大学) に学び鉄道院に入省し鉄道院参事、のちに戦後初の諏訪市長 (通算で2期) を務めました。

清が求めた鳥類標本は、すべて父汲治の研究に協力したものと考えられます。保存されている金井標本の中には、中国北京で入手したハゲワシやノガンなど大型鳥類はじめ、数々の外国産鳥類が含まれています。国際会議など海外に出る機会の多かった清が、滞在先で入手し汲治に送ったとみられます。

博物史にかかわる清の最大のエピソードは、明治38年にイギリス大英博物館で働くアメリカ人の動物学者、マルコム・アンダーソンが博物資料を求めて来日したとき、英語が堪能だった金井清が通訳をかって出て各地に随行。途中、奈良県東吉野村の鷺家口に立ち寄ったとき、地元の猟師がオオカミを仕留めて持ち帰ったところに遭遇。持ち金が少なくなっていたアンダーソンは清に値切らせるよう伝え、交渉の末に8円50銭で入手。この皮と骨格をイギリスに持ち帰りました。以後、ニホンオオカミの記録はなく絶滅。清は国内最後の1頭に立ち会った人となりました。この記録は「満州生物学会会報」第2巻、第2号に清が記しています。



金井 清

林正敏さんからお聞きしました

最後のニホンオオカミは、今でも英国のロンドン自然史博物館にあるそうです。実は八ヶ岳美術館の金井清さんの収集した鳥類の標本の展示に、金井一族の方が3回計10人見えました。皆さんそうそうたる方々でした。その中で、白石佐恵さん (金井清の孫・80歳以上とみえる方) と話げできました。

オオカミについて聞いたら、親戚6人とそのオオカミを見にはるばる同博物館に行ったそうです。常設展示ではないため、事前に連絡をして行った際、特別な部屋にそのオオカミの毛皮を係りの人が運んでくれたそうです。「思ったより小型でした」とのことです。

講談社「まぼろしの生き物」に掲載された日本オオカミ

講談社「まぼろしのいきもの」ニホンオオカミ、ニホンカワウソなど、絶滅したといわれながらも、いまだに目撃例の絶えない幻の生きもの、生存の可能性や絶滅の原因を科学的に解説。監修は、『ざんねんないきもの事典』でおなじみの今泉忠明先生！



奈良県吉野郡小川村



1905年1月23日に奈良県吉野郡小川村鷺家口で捕まえられた若いオオカミが最後の確実な生存情報とされています。